

青
あおおに
白
鬼
ク
調
ラ
ズ
査
5

呪いの絵画の謎を解け!

ノプロプス くらたけんじ
noprops・黒田研二 / 原作

なみつみ
波摘 / 著

すずらぎ
鈴羅木かりん / イラスト

優助

北部小学校の五年生。

レイカとは別のクラスだが、幼なじみなので仲が良い。サツカークラブに入っているが、オカルト調査クラブのメンバーとしても活動している。

レイカ

北部小学校の五年生。オカルト調査クラブ部長。学校一の美少女だが、オカルト好きで変わり者のため、友だちは少ない。オカルトのことになると周りが見えなくなりがちで、よく幼なじみの優助を巻きこんでいる。

スズナ

北部小学校の四年生。オカルト調査クラブのメンバー。夜の学校で青鬼から逃げるためにレイカたちと行動を共にし、オカルトクラブに入ることを決意。レイカになついている。



ひろし

レイカのクラスメイト。この夏、様々な場所で青鬼に遭遇し、そこで得た情報の一部をレイカに教えた。



タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。人間の言葉をすべて理解しているが、バレルと面倒なので秘密にしている。

たまちゃん

ひとだまのような青い炎を放ち、宙に浮かぶ。レイカたちに協力的だが、その不思議な力を使うためには、大きな代償を支払う必要がある。

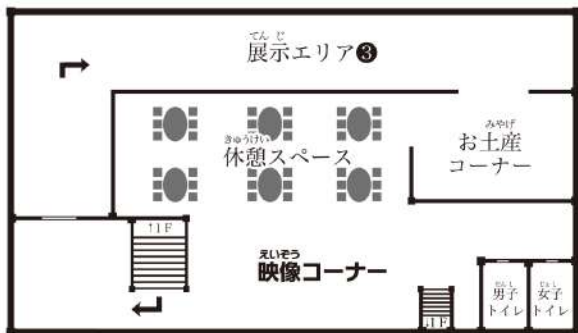


魔尾町現悩(デンノウ)

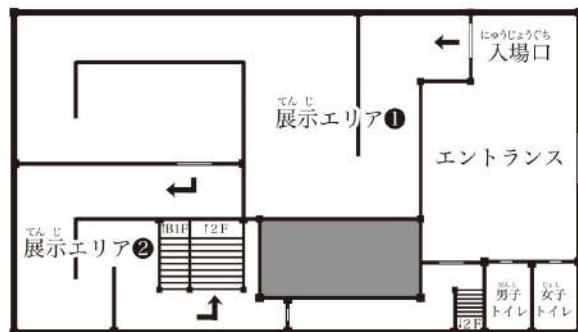
オカルトを中心に研究している民俗学者。青鬼に強い関心を抱いており、夏休み明けから北部小学校・オカルト調査クラブの顧問となった。

へき お び じゆつかん
 碧奥美術館の**見取り図**

2F

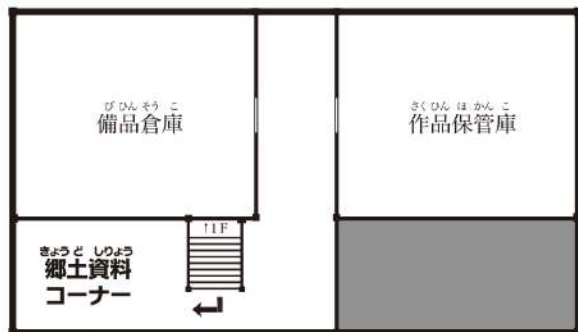


1F



しょうめん
正面
入り口

B1F



5

青鬼調査

あおおに

あおおにちようき	青鬼調査レポート	005
へきおびじョウかん	碧奥美術館の見取り図	006
なつやす	1 夏休みが明けて	007
オカルト	2 オカルト美術展	020
あお	3 青の悪夢	030
くろ	4 黒いドレスの女	045
げんじつ	5 現実じゃない場所	059
ゆうがい	6 幽霊たちの世界	070
なみだ	7 あふれた涙	083
たす	8 ありえない助け	096
びじョウかん	9 美術館の地下	116
かいぶつ	10 怪物とともに	127
いた	11 痛みの絵画	137
のろ	12 呪いの絵画	153
	13 おしまいにしよう	162
いっしょ	14 一緒にいる	171
しろ	15 白い花束	179
あおおにちようき	青鬼調査レポート	184
へきおびじョウかん	碧奥美術館の見取り図	186
	その2	

青鬼調査レポート

北部小学校オカルト調査クラブ
報告者：レイカ

【現状報告】

- 夏休みが終了し、二期期が始まった。
我がオカルト調査クラブは魔尾町現悩氏を顧問に迎え、学校公認の正式なクラブとなった。これにより今までの空き教室を部室として、引き続き活動を行うことが可能となった。
- 報告者（レイカ）は青鬼に関する情報を現悩氏と共有するため、本レポートとは別に、今まで判明した青鬼の生態についてまとめたレポートを作成中である。
これは碧奥港で現悩氏と交わした取引の一環であり、今後も現悩氏と協力をしながら、青鬼の調査を進めていくことになるだろう。
- 「オカルト調査クラブ」という名前を冠しているからには、青鬼以外のオカルト調査にも挑戦してみたいところだが、何か良い調査対象はないだろうか……。

1 夏休みが明けて

九月三日、放課後。

夏休みが終わって、二学期がやってきた。

身体がだるくなるような外の暑さはいまだに残っていて、オカルト調査クラブの部室の中もじわりと熱気がこもっている。

「レイカ君」

「なんですか、ゲンノウさん？」

部室には、わたしとゲンノウさんの二人だけだった。優助やスズナちゃんもそのうち来るはずだけれど、帰りの会が長引いてしまっているのか、まだ姿を見せていない。

課外授業で子ども向けに民俗学を教えることになったゲンノウさんは、臨時の先生という立場をいのように使って、授業以外の時間は校内をふらふらしたり、部室にノートパソコンを持ちこんで、新しいオカルト本の原稿を書いたりしている。

今日もわたしが部室に来た時にはすでに、集中した様子でパソコンと向かい合っているゲンノ

ウさんがいた。

邪魔をするのも悪いと思ひ、わたしも黙々と青鬼についての調査レポートをまとめていて、そこにゲンノウさんのほうから近づいてきたというわけだ。

「調査レポートの作成は順調かね？」

「ええ、もうほとんど完成しました。あとは細かいチェックだけです。完成したら、ゲンノウさんにもコピーして渡しますね」

「ああ、そうしてくれ。レイカ君の調査レポートは間違いなく、今後の青鬼研究の重要な参考資料となるだろう」

わたしは碧奥港でゲンノウさんと、ドクロ島に連れていってもらう代わりに青鬼の情報を渡すという取引をした。

すでに今までわたしが経験してきた内容は大まかに話してあるが、文章としてまとめることで、もつと細かく、正しい情報を共有できるはずだ。

最初はあまり気が進まなかったゲンノウさんとの協力関係だが、最近は少し考え方が変わってきている。

ゲンノウさんが顧問を引き受けてくれたおかげで、オカルト調査クラブは学校に認められ、正

式なクラブになった。勝手に使っていた空き教室も、今は部室として堂々と使用できている。

それに大人が味方になったことで、今後は調査できる場所も増えるはずだ。

そう考えると、悪いことばかりじゃない。

スズナちゃんは相変わらず嫌そうだけれど……。

「ところでレイカ君、こんなものに興味はあるかな？」

そう言つてゲンノウさんがわたしの前に差し出したのは、二枚の紙切れだった。

「何かのチケット、ですか？」

暑さのせいでじんわりと額ににじむ汗をぬぐつてから、わたしはそれを受け取り、内容を確認

する。

「——あつ、これは!？」

「ふふ、予想通りの反応だ」

ゲンノウさんがくれたのは、市内にある碧奥美術館の無料入場チケットだった。

そのチケットには現在開催中のイベント展の名前が大きく印字されている。

わたしは目を輝かせて叫んだ。

「『オカルト美術展』の無料入場チケット!!」

「仕事の関係で手に入れてね。私はもうすでに足を運んだが、まだチケットが二枚余っているのだよ。レイカ君がオカルトを学ぶのにちょうど良いのでは、と思つて持ってきたのだが、行く気はあるかな？」



「ということとは——これ、もらっていいんですか!？」

「ああ、もちろん。そのチケットはレイカ君が一番有意義に使ってくれるだろう」

「こ、この美術展、すぐ行きたかつたんですよ!!」

久しぶりにとてもテンションが上がって、わたしは興奮で震えながら早口になつてしまう。

現在、碧奥美術館で開催されているオカルト美術展。

それは普段の展示物に加えて、全国各地のいわくつきのオカルト美術品が集められ、特別展示

されている最高のイベントだ。

美術展の目玉は「呪いの絵画」と呼ばれている絵。今回の美術展のために、遠くの美術館から

借りてきたものらしい。

この美術展の情報を知った時、わたしはすぐお母さんに「行きたい!」と、連れていってもら

えるように頼んだ。

しかし、呪いの作品を見にいつて自分たちまで呪われてしまったら大変だ、と大反対されてし

まったのだ。

だからそのうちタイミングを見て、こっそり一人で行こうと思つていたのだが、ここ最近、青

鬼関連のトラブルが続いたことですからすっかり忘れてしまつていた。

「お、レイカが久しぶりにオカルトモードになってるな」

わたしが舞い上がる中、部屋の扉を開けて入ってきたのは、優助だった。

「優助、聞いて！ ゲンノウさんが『オカルト美術展』のチケットをくれたのよ！」

「あー、レイカがずっと行きたがってたやつか。良かったな」

「行くわよ」

「え？」

「今から行くわよ、優助」

「はあ!? ちよつと待て、いくらなんでも行動が早すぎ——」

「今日のクラブ活動の内容は美術館見学よ！ 決まり！ スズナちゃんが来たら、すぐに行きま

しょう！」

「レイカ、少し落ち着け！ だいたい、入場チケット二枚しかないみたいだけど……？」

優助に言われて冷静に手元を見返す。

たしかに……二枚しかない。

チケットには一枚につき一人、入場できると書いてある。

「どうしたらいいかしら……これじゃ一人、美術館に入れないわ」

「ああ、それについてだが——」

ゲンノウさんが何か言いかけるが、それをさえぎって優助が言う。

「うーん、たまにはレイカと一緒に美術館巡りもいいかなと思つたけど、チケットが足りないから、スズナちゃんと二人で行つてこいよ」

「ダメよ！　こんなに面白そうな美術展、なかなかないので。優助だけ仲間外れにはしないわ！」

「そうは言つてもなあ……」

「もう一枚のチケットはみんなでお金を出し合いましょ！」

「そうだな。じゃあ、そうするか」

「二人とも、少しは私の話を聞いてくれないだろうか——」

と、ゲンノウさんがまたまた何か言いかけた時、再び部室のドアが開く。

「あ、スズナちゃん！」

そこに立っていたのは、赤いランドセルを背負ったスズナちゃんだ。しかし、いつもと違って少し申し訳なさそうな表情をしている。

「どうしたの？」

「すみません、レイカちゃん。実は家の用事で早く帰らなくちゃいけなくなつて……」。

今日のクラブ活動をお休みしたいのですが……」

「あら、そうなの。別に全然構わないわよ——あつ」

わたしはチケットの存在を思い出す。

「レイカちゃん、それなんですか?」

「碧奥美術館で開催されているオカルト美術展のチケットをゲンノウさんからもらつてね。本当はスズナちゃんも誘つて、これから行こうと思つてたの」

「そうだったんですか。うう、一緒に行けなくてごめんなさい……」

「大丈夫よ。チケットも二枚しかなかったし、行く日を今日じゃなくて別の日に変えましょう。」

その間になんとかもう一枚チケットを用意して……」

と、優助が横からチケットをのぞきこんでくる。

「あ、レイカ。このオカルト美術展つてやつ、今日までみたいだぞ?」

「え、そんな!」

わたしは半分涙目になりながら、もう一度チケットをよく見る。

たしかに開催期間は今日までになつていた。

この美術展にはどうしても行きたい……。だけど、それだとスズナちゃんを置いていくことに

なる。仲間外れにするようなことはしたくない。でも……。

わたしはうむむ……とひどく悩みながら、スズナちゃんと目を合わせる。

よつぽど美術展に行きたいという気持ちわたしの表情に出ているのか、スズナちゃんはわたしの顔を見て小さく吹き出した。

「レイカちゃん、とつても行きたそうな顔してますよ。大丈夫ですつ、私のことは気にせず、優助君と行ってきてください」

「い、いいの……？ でも、スズナちゃんを仲間外れにするなんて」

「レイカちゃんはオカルトを楽しんでいる時が一番輝いていますから。私のせいで我慢させてしまったら、そのほうが気にしちやいます」

「そ、そう？」

優助もスズナちゃんに同意するようにうなずく。

「今のレイカが美術展に行きたくてそわそわしてるのは誰の目にもわかるし、ここはスズナちゃんの厚意に甘えさせてもらえばいいんじゃないか？」

「じゃ、じゃあつ！ その、スズナちゃんにはとつても悪いけど——わたし、オカルト美術展を楽しんでくる!!」



久しぶりの青鬼関係なしのオカルトイベン
トだ。

優助やスズナちゃんには見透かされていた
ようだけど、正直、これ以上我慢できそうに
ない。

「それじゃあ、私はこれで失礼しますねっ。
今度、美術展のお話聞かせてください！」

スズナちゃんは小さく手を振ると、そのま
ま帰っていった。

わたしたちも美術展に行くための準備をし
ないといけない。

「ゲンノウさん、チケット二枚でなんとかな
りました！」

と、ゲンノウさんのほうを振り返ると、な
んだか悲しげな表情のゲンノウさんがわたし

「たちのことを見ていた。」

「え、どうしたんですか、ゲンノウさん……」

「なんだかすごく悲しんでるぞ」

優助も気づいたようで、ぎよつとしている。

「いや、いいんだ。問題が解決したのならいいのだよ。だが……もし、スズナ君も行くことになつていたら、足りないチケット代くらいは私が出してあげようと思つていたんだ……。しかし、誰も私の話を聞いてくれなくてね」

ゲンノウさんがそんなふうを考えてくれていたというのは意外だった。それは優助も同じだったようだ。

「あー、その……すみません、ゲンノウさんが俺たちのことをそんなにちゃんと考えてくれてるとは思つてなくて」

チケットに關しても余つていたのでからくくれただけで、ただの氣まぐれだと思つていた。

さらにもう一枚分お金を出してくれるなんて、まるでわたしたちのことをどうしても美術展に行かせたいみたいだ。

そこで何かが引つかかる。

「……ゲンノウさん。もしかしてこのオカルト美術展の中に、わたしたちに見せたい『何か』があつたりしますか？」

わたしは探るような目でそう聞く。

すると、ゲンノウさんはさつきまでの悲しそうな表情から一転、気持ち悪いほどにやりと笑つてみせた。

「もちろんだとも。私が何の得にもならないことにお金を出すと思ふかい？」

「やっぱり……。で、この美術展には何かがあるんです？」

「どういふことだ、レイカ？ 話がよくわからないんだけど」

優助はゲンノウさんの真意に気づけていないようだ。

「ゲンノウさんは理由もなく親切にしてくれる大人じゃないわ。親切にするつてことは、何か裏があるつてことよ」

「やだな、そんな大人……」

優助はゲンノウさん本人の前で正直な感想を口にする。

いつもと変わらず、ゲンノウさんがその言葉に傷つく様子はない。それどころか楽しそうに、両手を広げてみせた。

「オカルト美術展の目玉である『呪いの絵画』——それは、青鬼に出会う前の私にとっては大して興味をひかれるものではなかったのだが……」

ゲンノウさんは怪しく目を光らせて言う。

「青鬼を知った今なら、あの絵画には何かあると断言できる。さあ、レイカ君、優助君。行ってきたまえ。君たちなら、あの絵画をより楽しむことができるだろう」